

グラナドスのピアノ連弾作品から読み解く 特徴的な音楽書法と音楽性

平井 李枝

宇都宮大学教育学部研究紀要 第68号 別刷

2018年2月28日

グラナドスのピアノ連弾作品から読み解く 特徴的な音楽書法と音楽性

A Study on Musical Writing and Musicality
of Granados' Duet Works for Piano 4 Hands.

平井 李枝[†]
Rie HIRAI

概要

本論文はスペインの作曲家エンリケ・グラナドスのピアノ連弾による作品《2つの軍隊行進曲》に焦点をあて、その音楽書法の分析から、グラナドスの音楽性について考察したものである。グラナドスは、『軍隊行進曲』という題名である楽曲においても、ルバートを必要とする書法やペダルの響きを重要視し、聴衆に優雅で上品な印象を与えていた。これには、グラナドス特有のピアノ書法が用いられており、これこそがグラナドスの独自性であるとの結論を得た。

キーワード：ピアノ演奏，連弾，スペイン音楽，グラナドス，音楽書法，鍵盤アンサンブル

Summary

This thesis focuses on the work *Two Military Marches (piano 4 hands)* by the Spanish composer Enrique Granados, trying to clarify the musicality of Granados from the analysis of the musical writing of this work.

Granados gave an elegant and elegant impression to the audience, with emphasis on writing requiring Rubato and the sound effect of the use of pedal, even in music titled "Military March".

In this work too, the piano writing method unique to Granados was used, and it was concluded that this is the originality of Granados.

keywords : Piano, Piano duet, Granados, Spanish Music

1. はじめに

本論文はスペインの作曲家エンリケ・グラナドス Granados, Enrique (1867-1916) のピアノ連弾作品について、その特徴的な書法を分析し、その演奏効果からグラナドスの音楽性について考察するものである。連弾とは1台の鍵盤楽器を2人以上で演奏する形態をあらわすものである。本論文の研究対象としては2人4手による連弾を取り上げる。連弾の場合、上声部担当(右側)をプリモ、下声部担当をセコンド(左側)という。

[†] 宇都宮大学 教育学部 (連絡先: rie@cc.utsunomiya-u.ac.jp 平井李枝)

グラナドスは、19世紀後半から20世紀にかけて活躍した作曲家である。グラナドスの作品は、彼自身が優れたピアニストであったため、ピアノのための楽曲がほとんどである。未出版のものも含め147作品（Hess 1991より筆者抽出）ある。その中で、ピアノのための作品が83作品で、その多くはピアノソロ（独奏）のためのものとなっている。同じピアノのための作品であっても、ピアノ連弾作品は2作品（1作品は未出版）や2台ピアノの作品はわずか1曲で、これはアルベニスの《イベリア》から〈トゥリアーナ〉を編曲したものである。

これまで、グラナドスの研究において、彼の鍵盤アンサンブル作品に関するものはこれまで全く見られなかったため、本研究において、連弾作品を取り上げ、その特徴的な書法からグラナドスの音楽性を考察することにする。

グラナドスはロマンティックな物語性を持つ抒情的でルバートを必要とする楽曲を得意としており、そのような演奏法を用いた書法による楽曲が彼の作品の大半を占めている。しかし、一定の速度を持続させて演奏する様式の楽曲は、グラナドスの全作品の中で、少数であり大変珍しい。さらに、グラナドスは民族的な特徴から3拍子に属性を持つ楽曲を多く作曲しており、2拍子の行進曲は数えるほどしか見られない。

グラナドスの作品の中でこれまでに出版されている行進曲は、《スペイン民謡による6つの小品》に収録されている〈オリエンタル・マーチ〉、《軍隊行進曲（ピアノ独奏）》《2つの軍隊行進曲（連弾）》の4曲のみである。

研究の一環として、筆者は《2つの軍隊行進曲》を何の先入観も持たない子供たちの音楽鑑賞教材として取り上げることも行った。ピアノ連弾のための《2つの軍隊行進曲》の第1番を、文化庁「文化芸術による子供の育成事業」「芸術家の派遣事業」による筆者の演奏会「Dr.りえのおしゃれなクラシック」で取り上げたところ、10曲以上演奏するプログラムであるにも関わらず、この曲について感想を書く子供が多く見られた。感想文には「とてもすてきな曲で心に残った」「軍隊行進曲という題名なのに、王様たちがダンスをしているみたいでキラキラした感じがした」「兵隊さんの音楽なのに、強そうではなくて、やさしくて楽しい音楽だった」「音がたくさん鳴って、楽しそうで、いい曲だった」という内容が記されていた。音楽体験の少ない子供たちが聴いたときの率直な感想こそが、グラナドスの特徴的な音楽書法であり、彼の音楽性をあらわしていると筆者は考えた。

そこで、本論文では、グラナドスの作品の中では非常に珍しい「軍隊行進曲」と「連弾」の2つの要素を併せ持つ《2つの軍隊行進曲》に焦点をあて、グラナドスのピアノ連弾による書法の特徴を分析し、グラナドスの音楽性を証明することを目的し、研究を行うことにした。

2. 研究の方法

本論文の執筆に先立ち、筆者は2017年5月に全音楽譜出版社より《2つの軍隊行進曲（連弾）》（校訂・解説 平井丈二郎・平井李枝）を出版している。この出版は2017年がグラナドス生誕150年にあたるため、記念して、グラナドスのあまり知られていない名曲を広める目的で行った。出版にあたっては、スペイン国立図書館に所蔵されている1910年カーサ・ドテシオ社の初版及び、ユニオン・ムシカル・エスパニョーラ社によるその後継版を分析し、楽譜の研究を詳細に行った。その結果、音価や音部記号、反復記号、発想記号など、様々な点における誤りや、グラナドスの音楽を再現するには不足しているものが多いことが明らかになった。さらに《2つの軍隊行進曲》の初版では、反復に関する指示が多用されていたが、大変煩雑で難解であり、筆者が録音資料などを調査した結果、演奏順序に差が出

る要因となっていた。そこで、問題点の解決法を探求し、全音楽譜出版社から実用的な校訂楽譜を出版することとなった。実際の演奏に則した版を目指し、反復記号の問題に関しては、記号による指示を用いず、延べ書きの方式に変更した。また初版において極端に少なかった演奏上必要となるアーティキュレーションも、活き活きとグラナドスの音楽を再現できるよう、編纂者(筆者)によってスタッカート、テヌート、アクセント、スラーなどを書き加えた。また強弱に関する指示も少なかったため、編纂者(筆者)が作曲者の意図を反映し、【 】を用いて追加した。

したがって、本研究においては、スペイン国立図書館所蔵の初版、その後継版は参照とし、その問題点を修正および訂正し、筆者の校訂により出版した全音楽譜出版社刊《2つの軍隊行進曲(連弾)》を使用することとする。

3. グラナドスと軍隊行進曲

グラナドスはロマンティックな事柄とロマンティックな音楽を好んでいた。これは筆者のこれまでの研究で明らかになっている。しかし、軍隊や行進と全く関連がなかったわけではない。グラナドスの父カリストはスペイン軍将校であり、4人の兄弟も全員軍隊に所属していた。さらにグラナドス自身は音楽の手ほどきを父の友人の軍人将校ホセ・フンケーダから受けたのであった。グラナドスの作品のなかでも極めて稀な「行進曲」の作曲は、このような背景から生まれたものと推察できる。ピアノ独奏用の《軍隊行進曲》はグラナドスの甥であるジョゼップ・キャンプ Josep Camps に献呈されており1914年ニューヨークのシャーマー社から Op.38 との作品番号が付され出版、1915年10月31日バルセロナにて初演されている。ピアノ独奏用の《軍隊行進曲》は未完の《6つの軍隊行進曲》の第2曲として作曲されたものであった。さらに6曲の中の2曲はピアノ連弾のための作品となった(Hess1991:122)。これが今回の研究対象楽曲連弾のための《2つの軍隊行進曲》である。

4. 作品の概要と作曲年代に関する考察

本論文で取り上げるグラナドスの《2つの軍隊行進曲》は、これまで先行研究等において、作曲年は不明とされていた。しかし、作曲年代については、1910年以前であるということは明らかとなった。1910年に発行されたカタロニア音楽雑誌の出版物案内に、この《2つの軍隊行進曲》について「エレガントで演奏会に最適な《2つの軍隊行進曲》がカーサ・ドテシオ Casa Dotesio 社(後のユニオン・ムシカル・エスパニョーラ Unión Musical Española) から出版される」という内容の記事が掲載されているからである。また初版楽譜についても、筆者の調査により、スペイン国立図書館に1910年カーサ・ドテシオ社の初版が現存することが明らかになった。

《2つの軍隊行進曲》は当時のスペイン王アルフォンソ13世(1886-1941)に献呈されており、カーサ・ドテシオ社初版及びその後継であるユニオン・ムシカル・エスパニョーラ社の表紙にも大きく記されている。また初版によると、この楽曲の著作権情報は1910年カーサ・ドテシオとなっている。

グラナドスは1901年にピアノ教授のための音楽院、アカデミア・グラナドスを設立しており、彼自身がピアノ教則本などを作成し、後進の指導にあっていた。作品成立の背景としては、このようなことから、ピアノ独奏作品だけでなく、連弾の作品も作曲するきっかけとなったと推察することができる。

〈軍隊行進曲第1番〉 D-dur(二長調)4分の2拍子 Allegrettoアレグレット

第1番は、王宮の近衛兵を思わせる上品で生き活きとした行進曲である。セコンドの力強い動機にプリモが高音部で合いの手を入れるスタイルの4小節のイントロダクションの後、セコンドの弾むような2拍子の伴奏型に乗せて、プリモにより二重音で構成される上声部のメロディーが始まる。カーサ・ドテシオの初版および、ウニオン・ムシカル・エスパニョーラの後継版では、プリモの冒頭の音部記号、左手がヘ音記号で記譜されており、明らかな間違いであったので、筆者による校訂版で訂正した。この誤りが、連弾であるにもかかわらず、2台ピアノのための作品と思わせる原因となっていた。5小節からは、可愛らしく気品に溢れた行進曲である。53小節からはA-durに転調してエレガントな曲調となる。85小節からのTrioトリオはト長調に転調する。流れるような曲調となり、表情豊かに演奏しながら、プリモとセコンドの手が交差する見せ場でもある。101小節からはセコンドにトリルが移動するが、前述と同様にトリルの冒頭の音に若干のアクセントをつけて演奏する。プリモはスラーとスタッカートの変化に特徴をもち、非常に楽しげな印象を与えている。113小節からは、冒頭のセクションが繰り返される。165小節からは締めくくりの部分であり、威厳を持って終わる。

〈軍隊行進曲 第2番〉 B-dur 変口長調 4分の2拍子 Lento Marciareレント・マルチアーレ

第2番は優雅で重厚な行進曲である。セコンドによるファンファーレのような2小節のイントロダクションの後、ゆったりとした行進曲が始まる。セコンドの伴奏型は左手で低音を奏し、右手は三和音で構成されている。この三和音は軽やかにスタッカートで演奏される。プリモは両手2声部ずつのユニゾンで、リズムの変化が粹である。スラーとスタッカート、またシンコーペーションのアクセントが生き活きとした印象を与える。19小節からはセコンドの3オクターブユニゾンによる力強いパッセージが印象的である。27小節からは一転してレガートによる優雅な旋律となる。51小節からはセコンドは手を交差させて演奏する。75小節からのTrioトリオは、変ホ長調に転調する。セコンドは2拍目で手の交差により、上声部を響かせる。交差を優美に行うことで、視覚的な演奏効果が生まれる。また装飾音も丁寧に演奏する必要がある。プリモはユニゾンのメロディーをレガートで表情豊かに演奏する。フレーズを大切に、装飾音、及び5連符はゆったりと余裕を持って演奏する必要がある。91小節Hは対照的に生き活きとリズム感あふれる曲調となる。

99小節からは冒頭部のセクションが繰り返される。117小節からは締めくくりの部分。セコンドとプリモの掛け合いを楽しみながら、最後は行進曲らしく堂々と終わる。

5. 特徴的な音楽書法

5-1 旋律の特徴

5-1-1 二声部による旋律

《2つの軍隊行進曲》の旋律において、多用されているものは、二声部による書法である。第1番では第1主題にあたる最も重要な旋律は、二重音となっており、この二声部は両手で奏する書法が用いられている。16分音符で書かれた3度の音程はレガートで奏され、8分音符はスタッカートとなっている。(譜例1)

A [Allegretto ♩ = 88]

譜例1 《軍隊行進曲第1番》 プリモ 第5小節～

譜例1に見られる二声部による旋律は、第1番で何度も繰り返し出現する。

5-1-2 四声部による旋律

第1番第69小節からでは、前述の譜例1で見られた二声部による旋律を、片手で奏する書法になり、さらに左右の手それぞれで二声部ずつ、オクターブの音程間隔で、合計四声部を奏する書法となっている（譜例2）。この片手で二声部ずつを奏する音型は、音を同時に奏することが非常に難しくなっているため、難易度が高くなっているが、譜例1と比較して、音量が倍に増大し、楽曲の盛り上がり形成するために効果を發揮している。

E

譜例2 〈軍隊行進曲第1番〉 プリモ 第69小節～

片手二声部ずつによる同様の書法は、第2番でも用いられている。第2番の3小節から始まる第1主題の旋律は、前述の第1番第69小節から（譜例2）と同様の、二声部によるオクターブユニゾンの書法が用いられている（譜例3）。ここでのパッセージは、第1番より音域が狭いため、二声部を左右の手それぞれでオクターブユニゾンとして演奏しても、譜例2よりは難易度は低くなっている。

A Lento marciale [♩ = 76]

譜例3 軍隊行進曲第2番 プリモ 冒頭部分～

5-1-3 ユニゾンによる旋律

連弾という演奏形態の特性を生かし、ユニゾンによる書法は《2つの軍隊行進曲》では特に第2番で頻繁に用いられている。第2番の第27小節からは左右の手で、オクターブの音程間隔によりユニゾンの書法で主旋律が奏される。旋律をオクターブユニゾンにすることで、重要な旋律を一層際立たせる効果があり、この箇所では順次進行による抒情的な旋律の美しさを印象付ける効果を発揮している。



譜例4 ユニゾンの例 軍隊行進曲第2番 プリモ 第27小節～

さらに第2番では第75小節からの Trio トリオ部分のプリモは第90小節まで、ほぼオクターブによるユニゾンによる書法で旋律が書かれている。

ユニゾンの書法は第2番ではさらに3オクターブ同時にユニゾンで奏する書法も特徴的に用いられている。一例を挙げると、第19小節からのセコンドである。ここでは、それまで伴奏部分の役割を担っていたセコンドに重要な旋律が割り当てられ、低音から上行する音型による旋律が力強く奏でられる。3オクターブのユニゾンによる書法を用いることによって、それまで音量がpと弱かったところを、fで演奏するために音量増大とそれに伴う力強さといった演奏効果を期待できる書法となっている。

譜例5 3オクターブによるユニゾンの例 軍隊行進曲第2番 セコンド 第19小節～

5-1-4 装飾による書法

グラナドスはピアノ独奏のための作品において、装飾音を多用しており、その書法がグラナドスらしさを象徴している。《軍隊行進曲》においても装飾音は様々な形で用いられている。

以下にその譜例を掲載する。

TRIO

G

75

8

p molto espres. e legato

79

8

譜例6 旋律に付された装飾の例 第2番プリモ 第75小節～

譜例6は第2番のプリモ75小節からである。この箇所は非常に抒情的でどちらかというと声楽的な旋律線を持っている。ここでは76小節に16分音符2つの前打音で記譜された装飾音が用いられている。このような装飾はグラナドスの他の作品でも多用されており、スペイン固有の民謡のコブシを模倣したものとなっている。さらに81小節の冒頭、16音符による5連音も特徴的な装飾音である。5連音による装飾もグラナドスはピアノ作品において多用しており、特にピアノ曲集《ゴイエスカス》においては、楽曲の性格を決定付ける動機として使用されている。5連音の装飾音が用いられる箇所では、グラナドスの演奏法の特徴として、テンポが少し幅広くなる傾向にあり、この《軍隊行進曲》においても、テンポのゆれが必要となる。そして装飾音の存在が、軍隊行進曲という題名でありながら、優雅で洗練された上品な印象をあたえている。

5-2 伴奏形の特徴

軍隊行進曲第1番において、セコンドは基本的には伴奏形を同一のリズム形態で奏する。これは行進曲の特徴的な書法を継承しているといえる。ここで、セコンドの右手には前打音が付されていることが多く見られ、この前打音の奏法が生き活きとした印象を与えるため、楽曲の演奏効果に大きな影響を与えている。

A [Allegretto ♩ = 88]

譜例7 軍隊行進曲第1番 セコンドの伴奏形 5小節～

〈軍隊行進曲第2番〉では、セコンドが奏する伴奏型が、低音と3和音により構成されている。この3和音がスタッカートで演奏されるため、重厚になりがちな和音の連続を、軽やかな印象に変える効果がある。(譜例8)

A Lento marziale [♩ = 76]

譜例8 伴奏形 軍隊行進曲第2番 セコンド 冒頭～

5-3 スペイン民族的音楽語法に基づく装飾

軍隊行進曲の基本的なリズム系は随所に用いられている。しかしグラナドスはそのリズムに時折スペインの要素を用いている。一例を挙げると第1番の59小節1拍目後半である(譜例9)。通常の行進曲のリズム様式であれば、ここでは強拍の左手のあと、通常であれば16分音符にて右手が奏されることが予測されるが、3連音による16分音符が用いられている。スペイン民族特有のリズムを用いることで、行進曲の中にスペインらしさを印象付けることに成功しており、スペイン王アルフォンソ13世に献上した作品として特徴的な書法となっているといえる。

譜例9 軍隊行進曲第1番 セCOND 57小節～

5-4 伴奏形の装飾

グラナドスは前述の通り、随所に装飾音を用いているが、それは伴奏形にも現れている。一例を挙げると101小節からのセCONDである。ここでグラナドスは、セCONDの右手の1拍目にトリルを配置している。この装飾により、一拍目の八分音符に比重がかかり、ペダルも使用するため音響効果としては滑らかな印象を与えている。このような書法も、エレガントな雰囲気醸し出す。

譜例10 伴奏形における装飾の例 〈軍隊行進曲第1番〉セCOND 101小節～

5-5 手の交差

《軍隊行進曲》では手の交差による書法が随所に用いられている。一例を挙げると第2番の第75小節から、Trioトリオ部分のセCONDである。ここでは、ペダルを用いて伴奏型が幅広い音域で演奏される。そしてト音記号で記譜された楽譜上で上向きの符尾を持つ音（譜例11の○で囲んだ音）は、手を交差させて左手で演奏する書法となっている。連弾において手の交差は、プリモとセCONDの距離感により、演奏に困難をきたす場合が多いが、この場合は、ペダルによる音響効果と手の動きの奏法によって、優雅な印象を与えている。この箇所ではプリモの旋律の中に、セCONDの左手で奏でる高声部（○の箇所）がペダルを用いて演奏する鐘の響きのような音響効果を生み出している。

譜例11 手の交差の例 〈軍隊行進曲第2番〉 セCOND Trio 75小節～

5-6 プリモとセコンドの交差

第1番の第85小節からのTrioはプリモがトリルを中心とした装飾的なモチーフを奏し、主要な旋律と伴奏をセコンドが奏する。譜例プリモはオブリガートとしての役割を持ち、4オクターブに渡る幅広い音域を、手を交差させながら奏する。そのため、セコンドとの交差も頻繁に生じることとなり、難易度の高い箇所となる。このような箇所は、連弾としての視覚的な効果をもたらすための書法となっており、グラナドスがこの楽曲を単なる練習曲ではなく、演奏会用の連弾楽曲として作曲したことを裏付ける根拠となる。

譜例12 プリモとセコンドの交差の例 〈軍隊行進曲第1番〉 Trio部分

5-7 優雅で叙情的な書法

グラナドスの《軍隊行進曲》には、非常に優雅で叙情的なセクションが印象的に配置されているという特徴が見られる。第1番では53小節からである。ここでは、レガート（滑らか）な分散和音によるセコンドの伴奏型の上に、多声的な書法によるプリモが表情豊かに歌う。ここでは上行する音型は

次第に強く、下行する音型は次第に弱くなるため、滑らかなフレーズ感が強調され、声楽的な叙情性が発揮される書法となっている。したがって、テンポにも若干のルバートが必要となり、行進曲の一定のテンポを揺るぎなく持続させる様式とは異なっている。このようなルバートを必要とする箇所は、元来の《軍隊行進曲》ではあまり見られないが、グラナドスの特徴的な書法として、グラナドスらしさを発揮している。

譜例 13 軍隊行進曲第1番 53小節～

6. 結論

グラナドスは彼の生涯に創作した作曲作品の中で、極めて稀な《軍隊行進曲》を、さらに稀な「連弾」という演奏形態によって作曲した。《2つの軍隊行進曲》には、旋律を二声部、二声部のユニゾンによる四声部、オクターブユニゾン、3オクターブユニゾン、装飾音などの書法を駆使していることが明らかになった。装飾音の存在が旋律線のルバートを促しており、このテンポのゆれが、聴き手に優雅な印象を与えているとの結論を得た。装飾音が付された旋律の書法は、筆者が博士論文にて執筆したピアノ曲集《ゴイエスカス》で多用されている書法と類似しており、スペイン民族音楽の歌における節回し（コブシ）から由来する書法であることがわかり、スペインらしさを印象付ける効果を持っていた。

連弾において、音楽の進行を担う伴奏型は、定型となり、反復されることが多くみられた。そして、行進曲でありながら、リズム感とともに、多少のテンポのゆれ（ルバート）が楽曲の印象を決定付ける働きをもっており、従来のある一定の速度で進行する「軍隊行進曲」の形式とは異なっていることが最大の特徴であった。

演奏者各人の手の交差やセコンドとプリモの手の交差は、連弾であるからこそその書法であり、これは演奏会での視覚的効果を狙った書法である。したがって、この楽曲は単なる練習用ではなく、冒頭にも記したように「演奏会用の連弾曲」であることが証明できた。

規律正しい印象の「軍隊行進曲」であっても、グラナドスは随所にテンポのゆれや、ペダルを用い

た響きの豊かさを要求する書法を用いており、これらがエレガントで楽しくキラキラした音楽であるという印象を与えていた。これらにはグラナドスの信念や平和主義があらわれており、彼のロマン主義的音楽性や物語性をうかがうことができる。

これまで筆者はグラナドスの様々な楽曲の分析をおこなって、グラナドスの書法の特徴を明らかにしてきたが、本研究において《軍隊行進曲》の書法分析を行うことで、グラナドスの音楽的価値とは、彼の持つ類稀なる音楽性、すなわちテンポのゆれを必要とする優雅で抒情的で物語性にとんだ音楽と、ピアノのペダルを使用した幅広い音域での音響効果にあり、これこそがグラナドスの音楽的なアイデンティティーであることがさらに明確に証明できた。

参考文献

Clark, Walter Aaron

2006 Enrique Granados: poet of the piano. London; New York: Oxford University Press.

Hess, Carol A.

1991 Enrique Granados: A bio-bibliography. New York: Greenwood Press.

平井李枝

2010 『グラナドスのピアノ曲集《ゴイエスカス》における間テキスト性の研究—引用を中心に—』
聖徳大学博士論文.

引用楽譜

平井丈二郎・平井李枝

2017 『グラナドス 2つの軍隊行進曲(連弾)』東京：全音楽譜出版社.

参考楽譜

1910 Enrique Granados : Dos marches militares. Barcelona: Casa Dotesio.

**A Study on Musical Writing and Musicality
of Granados' Duet Works for Piano 4 Hands.**

Rie HIRAI